

【書評・紹介】

吉岡乾 (著) / 西淑 (イラスト) 『なくなりそうな世界のことば』

(大阪, 創元社, 2017 年 8 月, 164×188mm, 109 頁, 1600 円+税)

津 曲 敏 郎

「小さな」言葉の窓から見わたす、広い世界——。世界にたった一つの、少数言語の単語帳。世界の 50 の少数言語の中から、各言語の研究者たちが思い思いの視点で選んだ「そのことばらしい」単語を紹介します。(表紙カバー見返し)



この短い文章が本書の狙いと成り立ちをよく表わしている。どの言語にも「その言語ならではの」、言い換えると「翻訳できない」単語がある。というより、実はあらゆる単語はその言語の中に居場所を占めていて、独自の意味の広がりを持っており、そしてそれは少なからず話者の「ものの見方」みたいなものにも関係している、と言えるだろう。それを実感するためなら、必ずしも「小さな」言語でなくても、およそ母語と異なる言語を学べば何かしらの発見はあるものだ。英語を初めて学んだときの、素直な疑問や驚きを思い出してみるといい。なぜ水もお湯も water でいいわけ? “I have a brother.” って兄さん/弟? 雄でも雌でもウシはウシでしょ…等々、数々の「不合理」に戸惑いながら、やがてそれが「お互い様」であることに気づく。実はそこにこそ外国語を学ぶ意味とおもしろさがあるとも言えるが、大言語ほどスキルとしての会話ばかりが重視されるのは、ことばの学びの肝心な面から目をそらしているような気がする。外国語と言えは英語、英語と言えは会話、と言語の世界をみずみず狭めている人にこそ、この本を手にとってほしい。

なぜ「小さな」ことばなのか、再び本書のことばを借りよう。

広い地域にまたがって色々な人、様々な文化の中で話されている「大きな」ことばよりも、数少ない人が特定の地域・環境で生活している中で用いている「小さな」ことばのほうが、もっともっと、背景となる文化から生じた知恵や、その生活ならではの認識・理解といったものを色濃く、純度高く反映していることだってあります。(著者まえがき)

その「小さな」ことばがなくなる、ということはそこに受け継がれてきた民族の知恵やものの見方、文化が失われるということであり、人類の知的文化遺産の喪失である。単語だけではない。むしろ文法の仕組みにこそ小さな言語ならではの複雑精緻な体系がひそんでおり、それが十分解明されないうちになくなるということは、人類言語の解明をめざす言語学(者)にとっての損失であることは言うまでもない。いや、何よりも話者自身にとって、固有の言語は伝達の道具以上の、アイデンティティの証にほかならない。

しかしながら、「なくなりそうなことば」に対する一般の関心や認識は、(たとえば同じく絶滅が危惧されている野生の) パンダ以下である。今日、世界に約 6 千の言語があると

して（本書では 7 千という数をあげるが、もとより概数でしか言えない）、ある試算によるとそのうちの半数は話者数 1 万人以下の少数言語であり、これらは今後 100 年以内に消滅すると見られている。話者数 100 万人以上の「安泰な」言語は全体の約 4%に過ぎないが、この 250 言語ほどのいずれかを地球上の 96%の人が母語としている。こうした少数言語をめぐる危機的状況と、言語数と話者数のアンバランスな状況は、一般にはほとんど知られていないのが現状である。

本書で選ばれた 50 の言語は危機度の高い言語ワースト 50 というわけではない。話者数 90 万という、まだしも「大きな」言語（アヤクチョ・ケチュア語、ペルー）から、すでに最後の話者を失った言語（大アンダマン混成語、インド）までが、話者数の順に並べられている。各言語見開き 2 ページの左ページに素朴な味わいのイラスト（カラー）とともに「そのことばらしい」単語が一つ、手書きのローマ字で記され、その意味が書かれる。右ページにカナの読みとその単語からイメージをふくらませるような文章が数行あり、さらにその言語や民族についての解説が続く。ページの端に置かれた数字は話者数を示しているが、ページを進むほどにそれが減っていき、最後にはゼロとなるのがいとおしさのような気持ちをかきたてる。ちなみに身近なところでアイヌ語は 5、ウイラタ語は 10 という数があがっている（もちろん話者数を正確にカウントすることも容易ではないので目安に過ぎない）。

一例としてウェールズ語（話者数 56 万 2 千、イギリス）の記載をあげよう。「ヒライス」という単語がまさに「ことばをなくす」ことの取り返しのつかなさ語っているかのようだ。

ウェールズ語：HIRAETH ヒライス「もう帰れない場所に帰りたいと思う気持ち」

帰る場所がある者は幸福だ。誰のことばだったのだろうか。もう決して届かないものに対しての憧れは切なく、だからこそ一層、捨てがたいものになるのか。(16-17)

最後に一つだけ難を述べるとすれば、巻末に名前があがっている 36 名の「協力者」（多くはフィールドで危機言語に取り組む日本の言語学者）の本書への関与の度合いが明確かつ正当に示されていない点だ。「小さな」ことばの専門家たちに、思い思いの視点で「そのことばらしい」単語を選んでもらい、一冊にまとめました」（著者まえがき）とあるだけだが、本書の根幹をなす、各単語をめぐる味わい深いエピソードや言語・民族の情報も専門家からの提供なしには考えられない。そもそも、どの言語にだれが「協力」したかさ示されていない。危機言語の研究者はみな「自分の」言語に愛着を感じ、その魅力を多くの人に伝えたいと願っている。少数言語のかけがえのなさを伝える大変よい本であるだけに、困難なフィールドでこれらの単語に出会い、それをいつくしむ個々の研究者を「協力者」として一括する取り扱い方には疑問を感じる。一書にまとめた著者（むしろ編著者？）の力量と努力には敬意を表すが、ここにあげられた単語一つ一つに研究者一人一人のどれだけの思いが込められているか、読者にはぜひ読み取ってほしい。

（つ magari・としろう／北海道立北方民族博物館）